

湯平温泉の町並みの形成史と 景観特性に関する研究

石丸裕佳子¹・大森洋子²・外尾一則³

¹非会員 佐賀大学大学院 工学系研究科都市工学専攻 (〒840-8502 佐賀市本庄町1番地)
E-mail: 11577005@edu.cc.saga-u.ac.jp

²正会員 久留米工業大学教授 建築・設備工学科 (〒830-0052 福岡県久留米市上津町2228-66)
E-mail: omori@cc.kurume-it.ac.jp

³正会員 佐賀大学大学院教授 工学系研究科 (〒840-8502 佐賀市本庄町1番地)
E-mail: hokao@cc.saga-u.ac.jp

大分県由布市湯平温泉は、江戸時代から湯治場として賑わい著大な温泉地であったが、現在は客数が減り衰退化している。地元では有志により活性化が模索され、今後の町並み整備をどのように行うべきか検討が行われている。そこで本研究では、今後の町並み整備の方針に資することを目的とし、これまでの湯治場としての歴史や文化をもう一度捉え直すとともに、地域の個性を現している景観の特性と景観資源を明らかにした。

Key Words : *landscape, landscape resource, traditional house, street, community development*

1. はじめに

鎌倉時代に温泉場が開かれたと言われている由布市湯平温泉は、かつては飲泉の湯治場として賑わい、名湯としてその名を広く知られていた。しかし、昭和40年代から徐々に客が減り、町の衰退に危機感を持つ地域住民によって、まちづくり活動が行われている。本研究では、伝統家屋が残るこの湯平温泉の町並みの形成史と、景観特性を把握し、今後の湯平温泉の町並み整備の方針を探るための基礎的知見を得ることを目的とする。

2. 研究方法

調査・分析は、以下のような方法で行った。現地調査は平成22年4月～6月に実施し、9月に補足調査を行った。

a) 町並みの形成史の把握

湯布院町史と古写真から町並みの成立過程を分析した。

b) 旅館建築物の特徴の把握

最も重要な景観要素である旅館建築の特徴を明らかにするために、悉皆調査から、典型的な旅館建築である旧稲葉屋旅館の実測調査を行い、平面図と矩計図を作成し、古写真や痕跡より建物の履歴を分析

した。

c) 景観特性の分析

地区内に所在する景観要素である建築物、石橋や石垣などの工作物、古木を現地調査により採取し地図と一覧表にまとめた。同時に建築物の用途、構造、屋根の形式・材料、階数、伝統様式の有無などの調査も行った。それから、景観の特性を分析した。

3. 地区の概要

調査対象の湯平地区は、由布市南部の標高500～550mの場所に位置する。急峻な花合野川沿いの石畳道の両側に約40軒の旅館や湯治客用の貸間や商店が並んでいる。昭和の町村大合併で旧由布院町と合併して、旧湯布院町となる以前は、療養型温泉として著名で、戦前は別府温泉に次ぐ、九州で第2位の入湯客を誇る温泉地として知られていた。温泉の泉質は炭酸を含む弱食塩水で、河岸に自然湧出するものと、山腹に横穴を掘って得られるものがあり、胃腸病などの飲用効果は広く知られている。共同浴場は5ヶ所で、国民保養温泉に指定されている。九大本線湯平駅から、4km南側の山へ登ると湯平がある。

4. 町並みの形成

(1)明治期

花合野川に沿った坂道の石畳は享保年間に敷かれたものという。江戸時代は温泉湯治の入場客の多くは士分が経済的にもかなり余裕のある人といった、限られた者だけしか利用できなかったが、明治になり通行の自由や様々な制約が解かれ、経済の余裕と輸送の整備に伴うことにより、徐々に湯平は大衆湯治場として発展していった。いまだ医薬の発展していない時代では湯治は最高の療養方法で、特に湯平温泉は江戸時代の初めより胃腸病に効くことでその名は天下に知られていたこともあり、次第に発展していった。

明治4年(1871) 7月、廃藩置県が行われ、それまで藩湯であった湯平温泉はこの時地区に下賜され、十数軒の所有となった。明治期までは坂道に沿って茅葺きの湯治場が並んでいた(写真1)。

(2)大正期

湯平温泉は明治45年4月20日に、ほぼ全戸を焼失する火災にみまわれる。その後直ぐに大正元年には金の湯温泉、次いで各共同浴場も次々に新築、旅館・商店もこれに次いで再建築した。11月には湯平発電所が竣工し、これが希望の灯となり復興に拍車をかけ、2、3年で以前を凌ぐ繁栄をもたらした。この再建の道程において、各種の画期的な事が行われたが、その一つは、屋根が従来の茅葺・竹瓦葺あるいは杉皮葺から全てトタン葺に変わったことである。火災に対する備えと寒冷地ゆえに瓦は凍害で使用できないことがその理由と考えられる。伝統的な葺き方は葺葺きである(写真2)。もう一つが3、4階建ての木造旅館が建設されたことである(写真3)。

大正6年には第一次世界大戦がもたらした好景気、加

えて湯平温泉線(佐賀県道幸野から分岐、湯平温泉に至る道路)が県道に編入され改良工事が実施され、更に大正12年には待望の久大線大分～湯平間が開通し、客は年々増加し、それに対応して諸施設も改良され、発展を遂げた。湯平温泉が近代的温泉場として形態を整えてきた時代である。

急峻な谷地に四周に縁側を回した開放的木造3階建てや4階建ての旅館が密集していた。

(3)昭和時代

昭和8年には、それまで湯平温泉の代表的源泉、金の湯・銀の湯は特定の温泉所有者によって管理されてきたが、共同浴場はその源泉と共に全部村有となり、村条件に基づく温泉使用料の納入で誰もが平等に使用できるようになった。今日全国でも珍しい共同浴場の無料開放がこの時から始まった。昭和初期までは賑わいを見せていた温泉場も戦争の拡大と戦況の悪化に比例して極度の不振に落ち込んでいった。昭和20年に陸軍は湯平温泉を大分陸軍病院の分院とすることにし、全旅館を陸軍が一括借上し、一切の湯治客を排して、多いときは800名の患者が収容されていた。終戦までのわずか5ヶ月の短い期間ではあったが、温泉場入り口に衛兵が立ち、出入りを厳しくチェックしたために入場客は全部追い返され、温泉場としての営業は完全に停止した。これが敗戦の虚脱感と相まって湯平温泉が他の温泉地よりも戦後の立ち上がり遅らせた大きな要因になった。昭和25年の朝鮮戦争の勃発による軍需景気で観光慰楽型の温泉地利用が多くを占めるようになり、湯平も慰楽型の観光地要素が強くなっていった。

その後湯治場としての需要が減り、内湯を持つ温泉旅館に変わってきた。しかし、旅館の老朽化が進み、湯病院温泉や黒川温泉の台頭により徐々に客足が減少した。



写真1 茅葺きの湯治場が並ぶ明治40年頃
出典 湯平観光協会



写真2 大正末頃の菱葺屋根の町並み
出典 湯平観光協会



写真3 大正末頃の3階建て旅館
出典 湯平観光協会

建物も昭和40年代頃から個室化を求める客の要望に応え、四周の縁側を室内に取り込み洗面台を設置するなどの改築が行われ、それまでの開放的な造りから現在の壁が多い姿に変わっていった。

屋根は金属葺きで、寄せ棟平入りである。

旧稲葉旅館は写真や痕跡調査から、大正末までは2階建てで、その後3階を増築したことが判明。

土地が狭いため、横に増築することができず、上に増築したと考えられる(図3)。

5. 旅館建築物の特徴

(1)旧稲葉屋旅館の実測調査

旅館建築の特徴を把握するために旅館建築の典型である稲葉屋旅館(写真4)の実測調査を行った。

配置図、平面図、矩計図を作成し、痕跡調査と古写真(写真5)より復原矩計図を作成した。その結果、以下のことが分かった。

平面図の特徴としては、1階は旅館であった当時のまま残っており、部屋が3部屋と厨房がある。風呂とテラスは増築されている(図1)。2階は現在、ショットバーアジトとして使われている(図2)。3階は、1階と同様に旅館であった当時の状態のまま残っており、部屋が5部屋と南側と東側に回り縁がある。

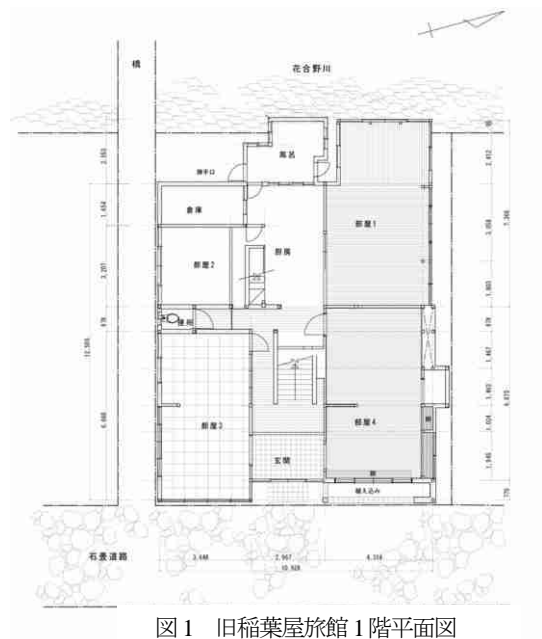


図1 旧稲葉屋旅館1階平面図



写真4 旧稲葉屋旅館西側
出典 湯平観光協会



図2 旧稲葉屋旅館2階平面図

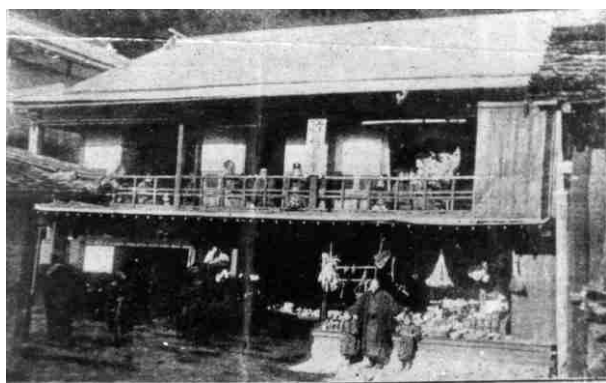


写真5 大正末頃の稲葉屋旅館
出典 湯平観光協会

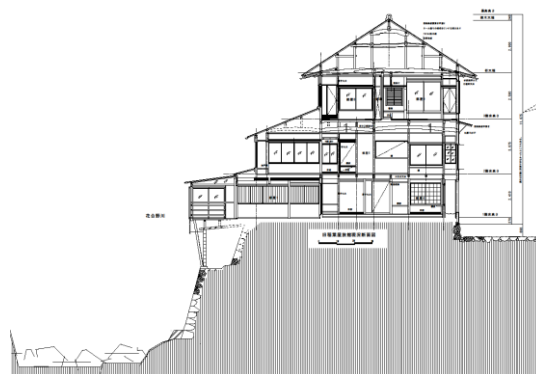


図3 旧稲葉屋旅館矩計図

(2)湯平温泉の建築の特徴

旧稲葉屋旅館の考察の結果と他の建築物についての外観調査及び古写真などの資料から、湯平の建築的特徴として以下のことが言える。

軒の長い菱葺き入母屋屋根で繊細な化粧軒裏が特徴(写真6)。平入りが多いが妻入りも存在している。当初は、いかにも旅館建築らしく2階～4階の四周に設けられた手摺りのある開放的な回り縁が設けられていた(写真7)。伝統家屋は外壁は真壁漆喰塗、腰は下見板張り一部縦羽目張りである。柱は120角程度が多い。旧稲葉旅館は写真や痕跡調査から大正末までは2階建てで、その後3階を増築したことが分かった。土地が狭いため、横に増築することができず、上に増築したと考えられる。湯平温泉の特徴である3、4階建ての木造旅館は、建設当初からその階数であったものもあるが、多くは増築されている。



写真6 繊細な化粧軒裏

出典 湯平観光協会



写真7 大正末頃のえびす屋旅館

出典 湯平観光協会

6. 景観の特性

(1)地域の建物ストックの現状

調査地域内にどれだけの量の建築ストックがあるのか、それらはどのような特徴があるのかを把握するために、地域内に存在する建物の現地踏査及び関係者へのヒアリングにより調査した。データ総数は198棟であった。建物の用途、屋根材料、階数等を調査したが全ての調査項目が把握出来ていない建物もある。また、小規模で簡易的な倉庫などは調査対象から外した。伝統家屋は22棟であった。

a)建物の用途

花合野川に沿うように町が集まっており、専用住宅は約5割を占めている。湯平温泉の特徴である旅館は48軒あり、約2割と住宅に次いで多い。共同温泉や車庫、飲食店や土産物屋など、温泉街としての機能を持つ建物も集まっている(図4)。

b)建物の階数

2階建てが128棟で6割を占めている。3階建てが19棟、4階建ての木造の旅館が3棟あった(図5)。

c)屋根の形状と材料

菱葺きの屋根が127棟で約6割で最も多い。明治の大火によって、金属葺きに変わった名残から、金属葺きは61棟で約3割である(図6)。

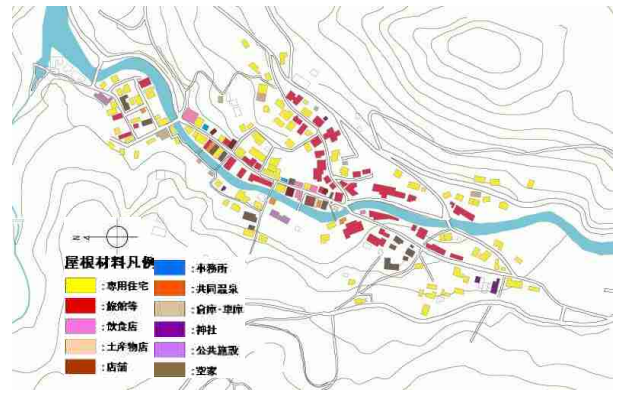


図4 用途別家屋分布図

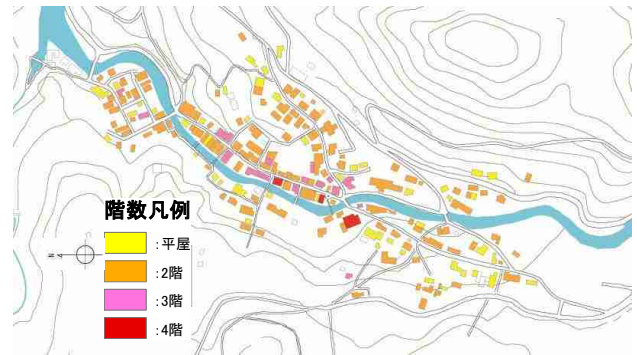


図5 階数別家屋分布図

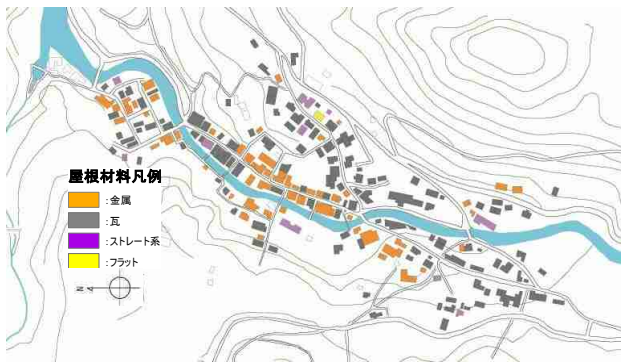


図6 屋根材料別家屋分布図



図7 景観資源分布図

(2)建築物以外の景観要素・工作物と樹木の分布状況

湯平温泉に所在する地域内に存在する現況景観の特性を分析するために、建物の現地踏査及び関係者へのヒアリングにより調査した。石積み、建築物、石積み以外の工作物、樹木を調査した(図7)。

その結果、以下のことがわかった。

a)石積み

山間の斜面地であるため、石積みが多く存在している。その中でも、割石乱積みが最も多く、石工により高度な技術で築かれた切石布積みも多く存在した。

b)工作物

斜面地であるため、石段が最も多く存在している。石工による高度な技術で造られた石造物が多い。メインの通りにある享保時代に造られた石畳が特徴的である。

c)樹木

ケヤキやウメが多い。志美津旅館の駐車場にケヤキが多く存在した。庭園も多く残っている。

(3)景観の特性

景観要素の調査・分析から湯平温泉の景観の特性としては以下のことが分かった。

a)急峻な谷を北流する花合野川に沿った歴史的な温泉集落である。平地が少なく、敷地が狭いため、床面積を増やすには階数を多くするしかなく、3階建て4階建ての木造建築が密集している。

b)従って、山間の集落にも拘わらず、前庭を持たない町家型の建物が、狭い石畳の坂道に軒を接して並ぶ独特の景観を形成している。

c)石畳の道路に接する西側敷地は、裏側が花合野川に面しており、東側敷地は裏側が斜面に面するが、どちらも敷地が狭いため裏庭もない家屋が多い。

d)斜面地であるため、平地を確保するには石垣を築く必要があり、切石布積みの上質の石垣が集落全体に分布している。花合野川護岸も石積みが多く残る。高度な技術を持つ石工により積まれている。集落内には石工はいな

い。石畳、石垣、石段、石祠、石神・石仏など石造の工作物が分布している。

e)斜面地であるため集落全体を見渡せる魅力的な視点が複数存在する。花合野川を渡る数本の橋からも、川と石積み護岸、建物、周囲の山が織りなす魅力的な景観を眺めることができる。

f)花合野川以外にも谷川や水路があり水が豊富である。

g)集落を囲むように山神社、谷川神社が存在し、薬師堂や教法寺、弁財天なども分布している。

7. まとめ

本研究では、伝統家屋が残る湯平温泉の町並みの形成史と、景観特性を把握し、今後の湯平温泉の町並み整備の方針を探るための基礎的知見を得ることを目的とした。その結果、湯平における景観特性は、町並みの成立過程によるものと、地形によるものがあると言える。その景観特性を以下に示す。

(1)町並みの成立過程による景観特性

a)明治期までは坂道に沿って茅葺の屋根が並んでいたが、明治45年の大火が起こり、大正元年に建築物が再構築されたことから、屋根は茅葺から金属菱葺へ変わり、3、4階建ての木造建築が建設される。

b)大正時代は第一次世界大戦の好景気に加え、交通整備がなされ、発展を遂げた湯平温泉は、近代的温泉場として形態を整え、急峻な谷地の四周に縁側を回した開放的で軒が長く、繊細な化粧軒裏の木造3、4階建ての旅館が密集していた。

c)昭和40年代頃から個室化を求める客の要望に応え、四周の縁側を室内に取り込み、それまでの開放的な造りから、現在の壁が多い姿に変わっていった。

このような成立過程から、湯平温泉は、大正時代に近代的温泉場として形態を整えたため、湯治場としての基

盤が残る地域である。さらに、大火後に再構築された、軒の長い菱葺きの屋根で、繊細な化粧軒裏の3、4階建ての温泉旅館が現在でも存在する。

(2)地形による景観特性

- a)土地が狭いため、山間の集落にも拘らず、前庭を持たない町家型の建物が軒を接して並ぶ、独特の姿を形成。
- b)石畳の道路に接する西側敷地は、裏側が花合野川に面しており、東側敷地は裏側が斜面に面するが、どちらも敷地が狭いため裏庭もない家屋が多い。
- c)斜面地であるため、平地を確保するには石垣を築く必要があり、切石布積みの上質の石垣が集落全体に分布している。石畳、石垣、石段、石祠、石神・石仏など石造の工作物が分布している。
- d)斜面地であるため、集落全体を見渡せる魅力的な視点が複数存在する。花合野川を渡る数本の橋からも、川と石積み護岸、建物、周囲の山が織りなす魅力的な景観を眺めることができる。
- e)花合野川以外にも谷川や水路があり水が豊富である。
このことから、急峻な谷地であるという地形の制約によって、変化に富んだ魅力的な景観を生み出している。

8. 今後の課題

湯平温泉は、明治期より湯治場としての伝統を育み、急峻な谷地であるといった地形条件から、歴史資源が濃縮されている地域である。歴史資源を持つ地域におけるまちづくりを推進していく上で、住民が景観要素をどのように捉えているのかが重要となる。住民の視点から、歴史資源をそのままの形で残していくものと、生活環境の向上のために変化させていくものを見極めることが必要である。歴史資源を活かすためには、地域の住民の生活スタイルに合わせた景観要素の位置付けが、今後の課題となる。

9. 謝辞

調査の実施および図面作成に協力頂いた内山徹氏に感謝の意を表する。

参考文献

- 1)湯布院町誌編集委員会：町誌『湯布院』平成元年一月三十一日発行